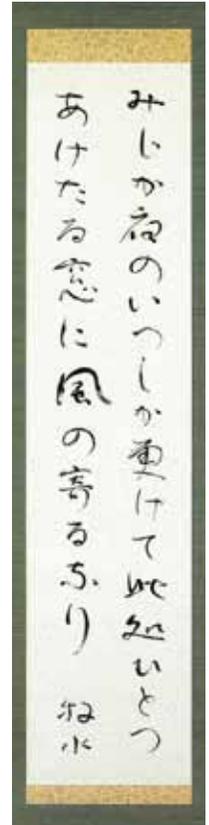


沼津市若山牧水記念館

第61号 平成30年9月10日

編集・発行 公益社団法人 沼津牧水会 TEL・FAX 055-962-0424
〒410-0849 沼津市千本郷林1907-11 http://web.thn.jp/bokusui/



みじか夜のいつしか更けて此処ひとつ あけたる窓に風の寄るなり 牧水

日中は暑かったが、夜も更けて涼しくなっている。家族たちは寝しずまって物音もない。その静けさにひたりながら何もかも忘れて、熱心に仕事を続けているうちにふと風の動きを感じた。目を上げてみると、ひとつだけあけておいた窓から涼しい風が流れてきて、「ああ、もう夜も更けたなあ」と感じたというであろう。この歌を静かに口ずさんでいると、心が清められるように感ずる。

牧水の高弟大悟法利雄による、この歌の解説を要約して紹介した(『鑑賞若山牧水の秀歌』昭和四十八年短歌新聞社)。

雑誌『創作』の大正八年八月号に載せられた「夏草」十九首中の一首で、第十三歌集『くろ土』(大正十年三月刊)所収の「雑詠」八首中の一首である。牧水は気に入っていたのだろう。丁寧に揮毫している。

ところで、大正八年の牧水は、大げさに言えば席あたたまる暇なしというくらいによく旅行して、満足に家にいたことがほとんどないと言ってよいほどであった。

一月は元日から三日まで犬吠崎へ。二月は家にいたが、三月は信州伊那地方、四月は上州磯部温泉、五月から六月にか

けて前橋から榛名の山上湖(榛名湖)、六月末は水郷めぐり、八月初めに巢鴨町内で転居、八月末から九月にかけて千葉県片貝村、十月末から十一月九日まで長野県星野温泉や大町、松本などに遊び、十二月二十日から千葉県大原海岸の帆萬千館に宿泊している。

この年、牧水は雑誌『創作』の発行のために悪戦苦闘しており、旅に出て、気分を一新しようとしていたのかも知れない。『創作』二月号に、創作社の基本金を作るために、和田山蘭、菊池野菊、牧水の三人が各自作の歌を一首ずつ半折に揮毫して、三枚一組で頒布する計画や『創作社叢書』発行の計画を大々的に発表している。しかし、これらの計画は挫折してしまった。『創作』十一月号は休刊、十二月号は本文僅か十二ページという状態だった。『創作』発行の悪戦苦闘は、翌大正九年もつづき、新年号は休刊、二月号は前年十二月号と同じ本文十二ページで印刷は長野で行い、三月号は二十六ページとなり、東京で印刷され、四月号は四十ページとなつて、いくらか雑誌らしい体裁を取り戻しているが、発行日は五月十五日と大幅に遅れてしまった。

そして、ついに、六七月合併号の「編輯所便」に、いろいろ考へた結果、いよいよ覚悟をきめて私は今度本誌の発行経営から身を引く事にしました。然し、選歌、編輯は従前通り全部私の手でやります。唯だ、帳簿金銭の整理、印刷所との交渉、雑誌発送販売等すべて事務的の為事を一切他に委託することにしたのです。

と、『創作』の発行経営を義弟の長谷川銀作に一任し、大正九年八月十五日、一家で沼津に引越して来たのです。

牧水の年齢の歌と、家族への葉書 永田 紅

人の作品を鑑賞するとき、それが小説でも、映画でも、音楽でも、短歌でも、その作品を作ったときの作者の年齢を意識してしまう。作品に接しているときには、なぜか作者たちは自分よりずっと年上で、先を歩いている存在のように思っていてどこかで安心しているのだが、実際に彼らの年齢を知ると、その若さでこの作品を作ったのか、と驚愕したり焦ったりするのである。

有名なサン・ピエトロのピエタ像は、ミケランジェロが二十三歳から二十五歳のときの作品であるというし、ベートーヴェンが交響曲「運命」を作曲したのは三十年代後半。夏目漱石が『我輩は猫である』を発表したのは三十七歳。黒澤明の「羅生門」は四十歳での、是枝裕和の「誰も知らない」は四十一歳での公開作品。村上春樹が『羊をめぐる冒険』を刊行したのが三十三歳、池田理代子が『ベルサイユのばら』の連載を始めたのが二十四歳である。もちろん、若さの迫力だけでなく、年齢を重ねなければ到達できない表現の領域というものはあるが、二十代から三十代の間に、

これだけの作品を残すということを、まぶしくも羨ましくも思い、そしてまたそのような作品を享受できる幸せを感じるところである。没年の若さにも、驚かされることが多い。

モーツアルト三十五歳。樋口一葉二十四歳。石川啄木二十六歳。正岡子規三十四歳。芥川龍之介三十五歳。彼らの生きた年数を、私はすでに越えてしまった。二十代での夭折では作品数も限られるが、三十代ですでに偉大な作品群が残っていることに、圧倒される。

作者の年齢や没年をこれほど私が気にするのは、ひとつにはもちろん若くして為した作品のすばらしさに驚くからだ、もうひとつには、「時間」というものを切実に感じるからである。自分がもうその年齢を越えてしまったという焦りや悲しみ、取り戻せない年齢への憧憬があり、さらにまた、もしこの作者がもっと長く生きていたならどのような作品を残したであろうかという、かなわぬ仮定への興味があるのだ。

昔と現代とは、寿命も、人間の精神的な成熟度も変わってきているとはいえ、ひとり

の人間に流れる絶対的な時間は同じ。一年なら同じ一年間である。そんな時間の流れのなかで、作品を残すということ、作品が残るということを、あらためて思う。

……と、ここまでくどくどと書いてきたのは、私が今、若山牧水の没年と同じ年齢に達したからである。牧水は、明治十八年（一八八五年）に生まれ、昭和三年（一九二八年）、四十三歳の誕生日を迎えてひと月足らずで亡くなった。今年、没後九十年ということになる。私は、牧水生誕のちょうど九十年後に生まれ、現在四十三歳。実はこの稿にとりかかるまで、牧水が亡くなったのはもったいなくとってからだろうと漠然と思いついてきたので、この事実になんか少しショックを受けた。あの牧水が、十五冊もの歌集を残し、酒を愛し、旅を愛してうるつきまわり、歌壇史に大きな足跡を残したあの牧水が、そうか、四十三歳で亡くなったのか。明治大正期のガス灯や電球のほの明かりの下で、マントをひるがえして歩いているような遠いイメージが、にわかに同年代の生身の人間の体温をもって

近づいてきた。牧水が残した八千余首が、今の私と同じ四十三年間の人生のなかで詠まれたことに、感慨をおぼえた。そして、それ以降の作品がないことを、やはり残念に思う。もう四十三歳よりも先を歩いてくれる作品がないことは、私をすこし不安にさせる。

濡縁の狭きに立ちてをろがむよわが
四十三のけふの初日を

森かげの路をゆきつつわが歳の四十三を
おもふけふは元日

最後の歌集『黒松』より。亡くなる前年、昭和二年の正月の作である。「四十三」は数えの年ということになるが、わざわざ年齢を詠み込んでいることから、この年齢にさしかかったことに牧水自身が自覚的であることがわかる。この年の五月には、喜志子夫人とともに朝鮮への揮毫旅行へ出かけるが、体調を崩して帰国し、その後の健康不調へとつながつてゆく。男性の厄年は、数え年で四十二歳が本厄（大厄）、四十三歳が後厄であり、そのような厄年への意識もあつたのではないかと思う。

一首目、「濡縁」という響きが懐かしい。私は子どものころに祖父母の家で濡縁の雑巾がけをしたことがあり、雨風にさらされた板

の手ざわりを覚えているだけに、「濡縁」という語に、年月にさらされてひびが入り、角も取れてまるくなつたというニュアンスを牧水が込めたかつたのではないかと深読みしたくなる。そこまで過剰な意味づけはないにしても、「濡縁の狭きに立ちて」には、今立っている足元、足場というものを読者に考えさせる作用がある。

二首目でも、森の小道を歩きながら年齢に思いを馳せている。どちらの歌でも、字余りにしてまで「四十三」という数字を入れていて、年齢への拘りが感じられる。

この「昭和二年元旦」の一連では、十九首のうち、「初日」「元日」どちらかの言葉が入っていない歌が、三首しかない。そして、「けふは元日」という同じ結句で終っている歌が八首もある。現代では、「初日」「元日」という言葉をここまで押し出す作り方をするのではないだろうが、年の初めにあたり、あらためて歌を詠む、という姿勢が生きていたことがうかがえる。当時、年齢というものを意識するのは、誕生日よりも、年のあらたまる新年であつたのだろう。

明けてわが四十といへる歳の数をかしき
ものに思ひなされる

ありし日はひとごととのみ思ひるし四十
の歳にいつか来にけり
いつまでも子供めきたるわがころわが
行ひのはづかしきかな

こちらは、大正十三年、四十歳の初春を迎えた牧水。『黒松』の「新年述懐」からの三首である。年が明けると、さあ四十代。牧水にとっても未知の年代である。「四十といへる歳の数」というもつてまわつた言い方が面白い。「不惑」とかなんとかわれたつて、四十歳はまだ自分に馴染まないのだ。二首目の「ひとごととのみ思ひるし」には、実感がある。然り、他人ごとであつたはずの年齢が、いつのまにか自分にやってくるのだ。三首目の「いつまでたつても自分の考えること、することは子どもっぽくて、恥ずかしいことだなあ」は、歌としてはいささか素直すぎるが、こんなところに人間くささが感じられて、みな同じなのだとクスツとしてしまう。

一方、若き日の第二歌集『独り歌へる』には、こんな歌がある。

男なれば歳二十五のわかればあるほど
のうれひみな来よとおもふ

早稲田大学を出たものの、適当な就職口も

なく、園田小枝子との恋愛のもつれがあり、雑誌『新文学』発行の計画は原稿を集めながらも資金難で頓挫し、徴兵検査を受けても不合格となり、心身ともに苦悶の日々。「あるほどのうれひみな来よ」には、「こうなつたらもうなんでも来い」という開き直りのようないさぎよさがあつて、読むほうはむしろつらくないのが不思議だ。「男なれば」「わかれば」のリズムのよさに救われるのだろう。二十五歳は、男性の初めての厄年（本厄）である。当時厄年がどの程度気にされていたのか定かではないが、「男なれば歳二十五の」には、やはり厄への意識が暗に含まれているのではないだろうか。「男性であるので、二十五歳といえは厄年でいろいろありそうだけれども、でも二十五歳という若さがあるから、大丈夫、何でも来い」というわけである。「歳二十五の」でいったん切れるようであつて、この「の」の使い方が面白い。

年齢を読み込んでいる歌を何首か見つけ、牧水も自らの年齢を気にしつつ、そこに折り合いをつけられずにいたことに、とても親しみを覚えた。年齢との違和。自分があるべきところにうまく収まっていない居心地の悪さ。それは人生を通してあり続けるのだろうか。

『独り歌へる』（明治四十三年、一九一〇年）の有名な「自序」は、このように始まる。

私は常に思つて居る、人生は旅である、我等は忽然として無窮より生れ、忽然として無窮のおくに往つてしまふ、その間の一歩々々の歩みは実にその時のみの一歩々々で、一度往いては再びかへらない、私は私の歌を以て私の旅のその一歩々々のひゞきであると思ひなして居る、云ひ換へれば私の歌はその時々私の命の碎片である。

一方、第十歌集『白梅集』（喜志子夫人との合著。大正六年、一九一七年）の「巻首」には、こうである。

「過ぎゆく時」、それを静かに見まもつてゐる場合と、時そのもののなかに自分自身をぶち込んで、若しくは巻き込まれて、よれつもつれつしてゆく場合とが私にはある。歌にも自然この二つの場合が出て来る。本集に収めた歌は総じて後者の場合に出来たものが多いやうである。そして、ともすれば絶望的な、自暴自棄的な、とり乱した心のひびきが随所に見えて居ることが自分自身にもよく感ぜら

れて誠に苦しい心地である。

年齢境遇の関係があるかも知れない。また漸次に歌を作り進んでゆく上から、是非経ねばならぬ一の道程であつたかも知れぬ。兎に角、従来のが歌風に無かつた斯の傾向を自らいま嫌悪と驚きの眼を以て私は見て居るのである。而して、心よりなつかしく本集を顧る日の一日も速く来らむことを祈つて居るものである。

二十四歳と三十一歳という年齢のひらきはあるが、前者の序文が、「人生は旅である」というシンプルで力強い、格好のよい断言であるのに対し、後者の序文では、「過ぎゆく時」と自分との関係に惑い、逡巡し、苦悩している様子が生々しい。「人生」という大きな捉え方から、日々身辺を流れてゆく「過ぎゆく時」へと視点がシフトしていることに納得させられる。

昨年、角川「短歌年鑑」平成三十年版座談会「人工知能は短歌を詠むか」において、私は、人間とAI（人工知能）との決定的な違いは、時間感覚である、と発言した。人間には必ず死が訪れる。その絶対的な死を先に見据えつつ、限られた生のなかで、どう生き、変化しながら詠んでゆくか。「時そのものの

なかに自分自身をぶち込んで、若しくは巻き込まれて、よれつもつれつしてゆく」という記述には、「時」が否応なく自分を巻き込み、「時」によって変化させられてゆく実感がある。「ぶち込む」「よれつもつれつ（縊れつ縛れつ）」という、やや乱暴で、そして体感を伴った、序文には珍しい表現には、状況を受け入れ、進んでいる途上であるという臨場感がにじんでいる。

「従来のが歌風に無かつた斯の傾向を自らいま嫌悪と驚きの眼を以て私は見て居るのである。而して、心よりなつかしく本集を顧る日の一日も速く来らむことを祈つて居るのである。」は、私の好きな部分である。「嫌悪と驚きの眼を以て」——自分の知らなかつた自分を新たに見出し、それに驚くことができるのは、表現活動が続ける喜びのひとつだ。「嫌悪」とまで言い切ってしまったところに、少しびっくり。「心よりなつかしく本集を顧る日の」——さらに時が過ぎ、本集を読みかえたとき、ああこんな時期があつた、なんと涙ぐましく若かつたのだらう、と振り返る。自らの来し方、変化の跡を留め得ることも、作歌の喜びのひとつに違いない。

A Iにも、「石川啄木風」の短歌、「シューベルト風」の音楽を作らせることが出来る

いう。しかし、表現、創作活動のあるべき姿は、同じところに留まり続けること、自己模倣や単純再生産ではないだろう。作風が変わらないことを求める向きもあろうが、「自分風」の作品を作り続けても、個人的にはつまらない気がしている。過去の自分の芯を残しつつ、超えてゆくところにこそ、表現活動が続ける醍醐味があろう。牧水が自らの変化に戸惑いながらも受け入れているこの序文に出会えたのは、嬉しいことだった。



話は変わるが、古本を買うのが好きな私の夫が、昨年、ヤフオク! (Yahoo!オークション) で『短歌文学全集』(全十五巻)を落札した。もう、どこに置くの、と呆れながらも見てみると、これが面白い。昭和十一年から十二年(一九三六年から一九三七年)にかけて第一書房から刊行された短歌全集で、その第一巻目が若山牧水篇である。以下、石川啄木、与謝野晶子、北原白秋、窪田空穂、釈道空、齋藤茂吉、前田夕暮、佐佐木信綱、島木赤彦、木下利玄、伊藤左千夫、吉井勇、石原純、尾上柴舟と続く。当初は「全十二巻」の予定だったようで、巻末にもそのようなラインナップが掲載されているのだが、途中で「多数の讀者諸氏からの増刊の要望と忠告」があつたらしく、「慎重の考慮を以て臨んで」、吉井以下三名が「新たに現歌壇の重鎮三氏を迎へ短歌文学全集完璧の全容成る!!」として「續刊」という形で追加されている(挟み込みの広告より)。このうち、刊行時にすでに亡くなっていたのは、牧水、啄木、赤彦、利玄、左千夫の五人だが、その中でも牧水が選ばれて第一巻目に据えられたのは、当時の評価と人気の高さゆえであろう。奥付を見ると、「最初豫約申込金五十銭」「豫約價一圓五十銭」との表記があり、これはま

ず全集の予約申し込みに五十銭が必要で、さらに予約をした人に対して各巻ごと一円五十銭で販売したということのようである。昭和十年当時、コーヒー一杯が十五銭、大卒の初任給が七十三円とのことだから、現在では一冊が三五〇〇円から四五〇〇円といったところだろうか。これが十五冊まとめて一万円以下で落札できてしまうことに申し訳なさを感じながらも、わくわくしながらページを繰った。

『若山牧水篇』は、牧水の死から八年後の発行であり、奥付には「著作者 若山牧水」「編纂者 若山喜志子」とある。「巻末に」も喜志子夫人が書いている。本全集の特色は、歌と散文を合わせて、「一月」から「十二月」までの十二に分けて編集していることである。出版社がなぜ月別に分けようとしたのか意図は不明だが、編集するほう（本人または家族や弟子など）にとっては、ずいぶんな苦労だっただろうと思う。ふだん作っている歌を月別に分けることなどなかなかできるものではなく、製作年も新旧入り混じったの分類になるが、そこにそれぞれの考え方や編集の方法も反映されるだろう。

まず、年譜の幼少期の部分がおもしろい。以下、抜粋する。(カッコ)内は筆者の感想。

明治二十九年(十二歳)

三月、首席にて坪谷尋常小学校を卒業。

明治三十年(十三歳)

第二学年に進級。常に級の上席にありて第三席を降らず、作文算術等を得意とす。牧水は腕白者なりき。色黒く小作りにして運動会には小なる組に入れられしが、競走には常に先頭を切り二着と落ちしことなし。〈成績の記述がしばしば出てきて興味深い。このころはまだ算術が得意。〉

明治三十二年(十五歳)

第三学年を修業す。此年延岡にはじめて県立中学校設立さる。牧水直ちに入学試験に応じ、第四番の成績にて入学す。

〈合格者一〇〇名中での成績。ちなみに、卒業は四十七人中七番の成績だった。〉

新校長に山崎庚午太郎氏あり、年少気鋭、スパルタ式の教育法に傾倒し校則峻厳、史学専攻の人なりしも文藻豊かにして「山家集」「桂園一枝」等を愛読し校友会雑誌等に華麗の文を寄す。牧水に及ぼせし影響少なからず。

〈やはりどんな先生に出会うかということの大きさを思う。のちに赴任してきた、英語教師でありながら国語・漢文・数学をよ

くする柳田友麿氏は、鉄幹、晶子等の新詩を口ずさんで生徒に英訳させたという。難しそだが、こんな先生に習ってみたい。〉

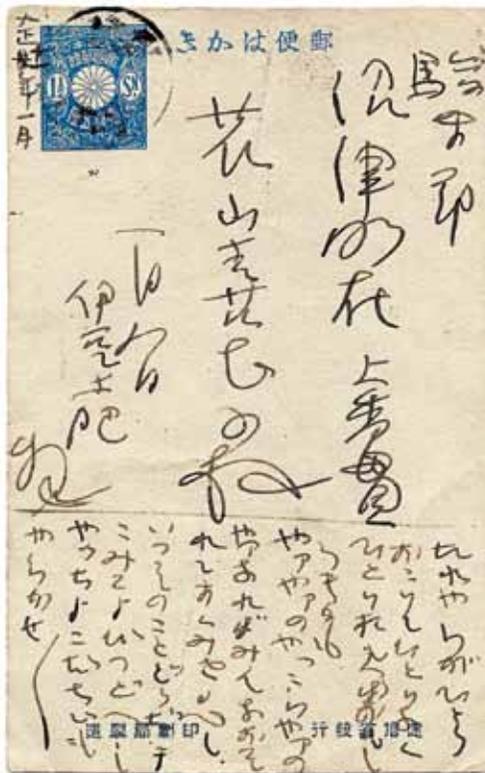
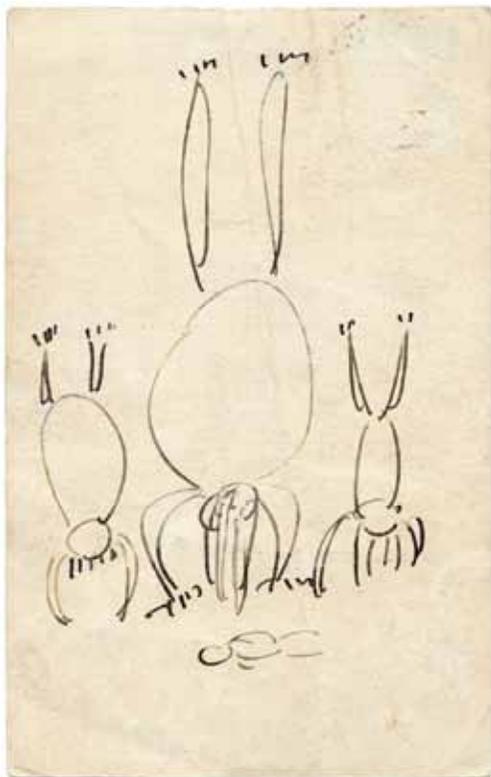
明治三十三年(十六歳)

二年級に進む。運動競技等より漸く離れはじむ。数学に対し嫌悪の傾向を生じ、国漢文に傾倒し盛んに文学の書に親しむ。

〈数学が嫌いになり、文系への変遷が見える。文学に出会わなければ、もともとの志望どおり家業の医学の道へ進んでいたのだろうか。そうなれば、歌人牧水もなかったのだろうかと思うと、不思議だ。〉

などなど、こまごまとした情報を拾ってゆきながら、作品とは違う角度から牧水が身近に感じられた。なお、明治四十年、園田小枝子と知り合つて恋に落ちるくだりは、「この年より某女と恋に陥る」という表記に留まり、明治四十二年には、「某女との恋愛のため悶々の情を抱いて……」などとあった。

さて、「一月」の項には、大正十一年一月八日、牧水が滞在先の伊豆土肥温泉から妻へあてて出した葉書に書かれた歌が、三首掲載されている(歌は、葉書の表面の下端に書いてあった)。そして、葉書の裏いつばいに牧水がペンで描いた絵も載っていて、目をひく。



喜志子による「注」によると、「これは私
が何かで多少ヒステ
リックな手紙を出した
のに対する返事」との
こと。子どもたちにも
読めるようにと、仮名
書きなのだろう。

一 首目は「誰やらが
ひとり怒りてひとり泣
くひとり思えばおもし
ろきかも」。

たれやらがひとり
おこりてひとりなく
ひとりおもへばおもし
ろきかも

やアやアのやつちやアの
やアなればみんなおそ
れてすくみを見るべし

いつそのことどうだま
こみこよびつどへし
やつちよこだちでも
やらかせ

この土肥温泉での滞在中、「土肥温泉にて」
一連（第十四歌集「山桜の歌」所収）では、
静かな落ち着いた歌の数々を発表しているの
と対照的であり、その両方が残っていること
が貴重だ。

旅ばかりしていた牧水は、子育てにそれほ
ど貢献したとは思われないが、娘たちを「ま
こみこ」と可愛くまともて呼んだり、「やア
やア」「しやつちよこだち」といった、それ
ぞれの家族内でだけ通じるような楽しい言葉

二首目は、喜志子にあてて、そんなに
「やアやア」と怒りちらしているは、みんな
怖がつてすくんでしまふ、とたしなめている。
三首目の「まこみこ」は真木子（次女）岬
子（長女）のことで、絵の中央でしやつちよ
こだち（鯨立ち・さかだち）しているのが喜
志子、下に横になっているのが赤ん坊だった
次男の富士人とのこと。「いつそのこと、ど
うだ真木子、岬子よ、ベッドへ鯨立ちでもや
らかせ、やらかせ」という具合だろうか。牧
水の描いた絵がなんともほのぼのと可愛らし
い。歌人牧水が、家族へこのような形で、遊
びのように親しみを込めた歌をおくっていた
ことに感激する。

のやり取りをしている様子が残っていることに、価値がある。いわゆる「書簡集」からも洩れてしまいそうなこのような日常の言葉を、現代でも積極的に残すべきだと思う。

私事で恐縮だが、亡くなった母は、よく卓の上に書き置きをしてくれた。「冷蔵庫の〇〇を食べてね。洗濯物とトムを取り込んでおいてね。」などのメモ書きに加えて、猫の顔などちよつとした絵が添えられていたりして、とても面白く、味があつてあたたかいものだった。読めばさつきとゴミ箱へ捨てていたが、今思うと、あれらの紙の切れ端を残しておけばよかった。日常の細々としたものはあまりにふつう過ぎて、あえて残そうとはしない。けれど、その肩肘張らないごちゃごちゃこそが愛おしいのだと、過ぎてはじめて気づくのだ。牧水のこの家族への葉書の歌と絵を見て、そんなことをあらためて思った。

家での日常と、旅での非日常。牧水にとって、もはやどちらが日常であったのかよく分からないが、帰ってくる家は、いつも定点として意識されていただろう。帰る場所を持たずに漂泊することと、戻るべき場所を持つ差

は大きい。「黒松」には、「竹の歌」一連にこんな歌がある。

植ゑて今年三年となりぬわが竹は痩せ瘦
せて立つ家のうしろに

幹瘦せて枝葉ともしきわが竹の孟宗に
百舌鳥もずがよく来てとまる

伸びたちて幹なほやかに枝葉深くこもら
ひ茂る竹をわが愛づ

日照れば濃き影落し雨降れば濡れてしだ
るる竹をわが愛づ

三年前、家の裏に、自分で植えた孟宗竹。痩せてはいるが、百舌鳥が来てとまり、日射しに雨に表情を変えるその静かな存在を、牧水はおそらく旅に出てもどこかで感じ続けていたことだろう。そして家に帰ると、定点として、竹がそよぎ、家族がいる。植物も子どもも育つ。定点であり、しかも育ち続ける者たちを傍に持つことができたのは、やはり幸せであつただろうと思うのである。

〈編集部註〉七頁に掲載した葉書は、若山家の所蔵です。



「筆者プロフィール」ながた こう
昭和五十年、滋賀県出身。京都大学大学院農学研究科博士課程修了。京都大学助教。父永田和宏、母河野裕子、兄永田淳も歌人。十二歳で父の主宰する「塔短歌会」に入会。大学在学中から京大短歌会にも所属して積極的に活動をする。平成九年「風の昼」で第八回歌壇賞、同十三年第一歌集『日輪』で第四十五回現代歌人協会賞を受賞。平成二十五年第三十一回京都府文化賞奨励賞を受賞。
そのほかの歌集に『北部キャンパスの日々』『ぼんやりしているうちに』エッセイ集『家族の歌 河野裕子の死を見つめて』（共著）がある。本年九月に第四歌集刊行予定。平成三十年三月に開催した第三十回「雛の歌会」の講師